

CDPAによる集団特徴の研究

— 浪人集団の特徴について —

続 有 恒

I. 問 題

調査CDPAは約4万6千名の中学生、高校生による基礎資料によって、256個の性格適応のパターンの解釈と、それらのパターンの出現度(万分率)とが確定された。⁽¹⁾そこで、この調査によって明らかにされるべき問題に取り組むことになるのだが、そのような問題として、例えば次のようなものが考えられる。

その第一は、既に荻野が着手しているように、自己評定による調査結果と他者評定による調査結果との関係および、その総合による性格理解の問題である。既に、CDPA作成の途上において、自己認知および他者からの認知の不一致が気づかれ、それをどう取扱うかが種々仮説的に討論された。荻野が取上げている精神病患者の場合もさることながら、必しも病的でない人物においても、自己認知と他者からの認知の不一致が何を意味するかは、検討を要する問題である。一例として、ここに一組の夫婦の自己認知および相手からの認知の不一致の実例を示そう。

夫の自己認知によれば、彼は

176

男生徒 BABA BBbB

女生徒 BABA BBbB

非常に出現頻度の高いタイプである。

1. 全般的性格像

1.1. 男生徒— 自分のものがかなりハッキリしている。才気がある上に、着実に、失敗のないよう、よく確かめてから行動を起こし、また必要あって他人と相談すべきことがあれば、必ず慎重に相談するという風であるから、まずまちがいはない。こうした過程を経て決心に到達した以上は、もう誰が何といおうと、どこまでもそれをやり遂げようとする意欲がある。十分検討した上で見通しを立てたのだから、その仕事に熱心に打ち込み、それが終わるまでは、次に移れないといった手堅さもある。

考えがしっかりしていて、自分を押し通すことも多いし、友達との付き合いもかなり限られている。ある程度高

尚な世界に生きて、世俗的な交わりを避けようとする構えも見られはするが、そうかといってあまりお高く止まって、周囲から隔離し、孤立してしまうことはまずない。

ただ、時によっては、何事もうまく切り抜けて上手にやっついていくやつだという風に見る人もないではない。たしかにうまくやっついていける生徒であるし、自分でちゃんと人のために尽くしてやっているのだという気持が強くなると、そういう印象も出てはくるが、しかし基調としては、協調的にいける生徒である。

1.2. 女生徒— やはり堅実といってよい。自分の能力を正しく認知して、それ以上に出ないように、じっと押えているところがある。遊ぶ所は安全な所でなければいけないと思っているし、トランプなどで「一か八か」にかけるなどということは、まずこの人には考えられない。おとなしい、着実な生徒である。

芯はしっかりしている。だから、必要な時にちゃんと自己主張もするし、それがその場限りのものでなく、十分練られた、この生徒の信念のようなもので、かなりの線をいっている。

才気がある方だけれども、根気も全然ないとはいえない。本などは雑な読み方をせずに、初めから終わりまでジックリ読む。何かにつけてきちんとしている。教科にしても、好きなものはハッキリしているのではあるが、嫌いなものでも差別せず、一応勉強しておかなければならないといった考えに従っている。事実また、どの科目にわたっても勉強し、周りからみて片寄りが全然見られない。もし悪い成績でもとったりすれば、なぜそんなことになったのかと、もう一度ジックリ振り返って反省し、原因を徹底的につきとめて、二度と同じ失敗を繰り返さないよう注意する周到さがある。

2. 考えられる問題の行動または不適応

2.1. 男生徒— 皆の中心になって、進んでリーダーシップをとっていく積極型の生徒ではないが、いべきところはきちんいい、ふだんは表面に出ないで自分を守っている、おとなしい、着実な生徒である。出過ぎもしないし、また不必要に引っ込んででもない。ただ、それですべてが通ると思っているところが気になるといえば気になる。男

の子だからもう少し冒険心があってもよいと、状況によっては、周りの人から思われることもある。

2.2. 女生徒— 女の子であるから、こうしたおとなしい静かな生徒である限り、別に問題はない。友人関係でも、自己主張するわりに控え目であるし、何よりも堅実であるから、それほど皆に嫌われはしないし、決して浮き上がってはいない。ただ時として、あまり優等生的感じが表面に出過ぎると、なんとなく要領のいい自分勝手な人と当たらず触らずに扱われることになりかねない面はある。

これに対し、妻から認知された彼は、

164

男生徒 BABA AaBB
女生徒 bABA AaBB

1. 全般的性格像

1.1. 男生徒— 安全第一主義であり、親や教師、先輩など、目上の指示や教え、あるいは意向に沿っていれば間違いない、あるいは、そうすることが当然だと考えている。慎重さはあるが、それは時間をかけてジックリというのではなく、判断の基準になるものがハッキリしているので、どこまでなら失敗しても損は少ないとか、どうすれば人から文句をいわれることが一番少ない、といった結論がすぐにも出てくる方である。何か自分で新しく事を起こしてみようといった開拓精神はみられず、創造性も感じられない。ただ平穩無事であることを願ひ、上長の指示や意向に従って、毎日が事なく過ぎていくことを願っている。

興味、関心のある領域は狭く、ハッキリしており、普段は独りでコツコツと自分の好きなことをしているようである。仕事は丁寧で非常に細かい。しかし、一方で他人の思惑がいつも気になり、人がどう思っているか、どのように評価しているか、できるなら悪い評価は得たくない、といった気持が働いている。そのため、自分だけの世界に閉じこもってしまうこともなく、目上の人に相談に出かけたりもするようである。うまく事が運んだ場合はともかく、うまくいかなかった場合には「あの人が従って動いたから損をした」といった気持をもつこともある。直接表だって攻撃的な行為を示すことはなからうが、不満が内向して、人間不信の気持を強めることはあり得よう。

仲間と接することは少なくないが、真の友人関係はできにくいようである。

1.2. 女生徒— 男生徒に比べて、自分なりの判断で動こうとせず、目上に従順であろうとする構えが一層顕著になってくる。相談しないと、あるいは、人の意見を聞いたり、指示をもらったりしないと動けないといった風である。平穩無事を願ひ気持も一層強く、入試なども倍率を考え、すべて人から笑われるようなことはしたくないという考えがあるので、三流四流でも合格確実な所にするといった風である。自分自身で決定するということがないため

に何か問題が生じて、みずか責任を執るということはなく、どちらかという自分よりも年下の人に、責任を転嫁したり、非難を向けることもある。

少し暗さはあるが、目上に対しては不快感を与えまいと、いろいろ気を遣う方であり、よく気の利く人だと重宝がられることもある。しかし、友人仲間では「オベッカつかい」とか「先生へ取り入ろうとする」などの、本人としては不本意な評価を得て、あまり受け入れられないようである。

1.3. 知的水準による差違— 知的に高い場合でも、基本的な在り方はほとんど変わらない。状況判断がもう少し速く、しかも的確になることはあろう。知的に低ければ、失敗の可能性も大きく、そのため自分の世界に閉じこめることも多くなるであろう。

2. 考えられる問題行動または不適応

2.1. 男生徒— 明るさ、快活さがなく、小心翼翼としたところが目立つ場合がある。とかく人から悪く見られていると思いがちで、実際に非難めいたことでもいわれようものなら、全くクシュンとしてしまい、クヨクヨ考えることが多い。自分なりに考えてがんばり通すといったことのない点が問題となろう。

2.2. 女生徒— なんでも目上の教えに従って安全でまちがいない道を、と願っている。そのこと自体はよいが、うまくいかなかった場合に、自分のことは棚に上げ、とかく状況のせいにして、仲間のせいにしてしがちである。そのため仲間からの受けは悪く、孤立しがちであろう。圧力の少ない家庭などでは、自分の不満をぶちまけるようなことも見られることがある。

また、妻の自己認知では、彼女は、

159

男生徒 bAAB BBBA
女生徒 BAAB BBBA

1. 全般的性格像

1.1. 男生徒— 積極性と機敏性が目立った特徴である。何らかの規範に基づいて（その内容はハッキリしない）直感的に判断していく。自分としては、合理的に考えたと思っているし、問われれば、答えるだけの理由はもっている。持ち前のヒラメキの良さを存分に発揮して、友達と話しながらいっしょの計画を立て、「これからが自分の仕事だ」といった調子で行動に移していく。合理的判断に基づいた計画とはいっても、多くは雑な内容で、失敗などあまり気にとめていない。いずれにしても「こうだ」となると、友達になんといわれようとやり遂げたということになり、持ち前の豊富なエネルギーに任せて押しまくる。むしろ、強引さが出てくる。自分だけのことでなく、他人に対しても同様で、善意の押し売りのようなことを、これまた強引にやってしまう。自分の善意が相手に伝わらなかったりすると、大声でまくしたてるようなこともあるだろう。

内にこもらず、明るく、天真爛漫といえはいるが、一方的な感じもする。自分の考えはそれなりにもっているもので、軽薄さはあまりない。

人との接触でもその機敏性は発揮され、誰とでも適当に付き合っている。発言量も多く、この生徒がグループにいるといないとは、雰囲気がいぶ変だわってくるだろう。

交友関係に限らず外界への興味や関心も幅広く、何でも見てやろう、聞いてやろうということになる。ただ残念なことは、持久力がないので、広く浅く、その場のことで終わってしまう点である。こんな調子だから、交友関係でも深い交わりにはならない。本人の気持としても、皆と一緒にワイワイやっているより、独りでいる時の方が安定するように思っている。しかし、しいぞ独りになってみても結局は落ち着かず、なにかと動き回っていて、結局は何もできないということになりはしないか。

1.2. 女生徒— 男生徒とはほとんど基本は同じである。やはり行動性はあるのだが、男生徒のようにそれが他者に向けられるより、独りでなにかゴソゴソ整理のようなことをやっているといったものになる。抑圧的なところはなく、明るく、開放的であるが、男生徒ほど強引なところはなくなり、多少落着きも出てくるようである。ヒラメキ、機敏性は女生徒の場合もやはり特徴である。

2. 考えられる問題考行動または不適応

積極性自体は大変いいことだが、調子のよさになってしまふと問題行動と結びついてくる。知的水準が上であればまず問題はないが、そうでないとなにかと口出して、雰囲気や乱し、皆を扇動していくことになる。ただこの場合も、明るく、陰にこもることはないし、いうことのわりにはやることは小さいので、非行といっても、それ程大事になるようなことはないだろう。知的水準が中以下だと、ホスイかんによっては先頭に立って軽卒な行動をするようなことが起こってこよう。非行とまではいなくても、教室内ではいつもゴソゴソとして、集団全体の落着きをなくしていくことが多い。

女生徒の場合、非行はまず考えなくてもいいが、知的水準が低い方だと、案外屁理屈を並べたて、おせっかいで、皆から嫌われはしないまでも、うるさがられるようなことも起こってこよう。いずれにしても情緒障害は少なく、特にそれが反社会的問題行動につながっていくことはないだろう。

これに対し、夫から認知された彼女は、

110

男生徒 aBBA BbaB

女生徒 aBBA bBAB

1. 全般的性格像

1.1. 男生徒— 坐業は向かない。頭を使うよりも身体

を使う方。独立独歩というのではなくて、仲間と一緒にやるのが好きである。関心はハッキリしているが、もちろんそれは思索的、抽象的なものではなく、行動的、具体的な方面である。スポーツ好きで、集団でやるものが多い。

計画を練ったりすることは得手ではない。むしろ、もっとも標準的な計画を求め、その通りにやっつけようとする。ある方面では、世間並みというのが標準になる。何か自分が編み出した新規なことをやろうなどとは考えない方で、標準通り、型にはまってやり通す方である。持続力はあるが転換がきかない。

物事の取捨選択は、好みハッキリしているのも、是非善悪でも、好みに合う合わないで決められる傾向があるが、実行は慎重で、事前に相談もし、一応成否の見込みも検討してみる。そのあげく決心がきまると、多少の反対は押し切って実行していく。もちろん、人をあやつって実現しようというのではなく、自分が先に立ってやるのである。口は達者ではないが、いうことはハッキリいう。

自分のやりたいことを強引に一方的にやり通すようにも思えるが、案外、バカなこととはしない性分、進学に必要なだとあれば、嫌いな科目も勉強する。変な見栄は張らずに、存外、勘定高いところがあるようである。

1.2. 女生徒— 気転がきくというのではなく、がんばりがきく方である。興味の範囲がハッキリしていて、何にでも手を出すというのではないが、また、自分から新しいことを始めようというのでもない。シキタリ通りのこと、あるいは、大雑把に道筋ができあがっていることを、コツコツと整頓し整理していくのが性に合っている。頭のなかで、ああでもない、こうでもないと考えをこねくり回すことは大嫌いである。とにかく何人かで、口も動かし手も動かすといったことが好きで、やるべきだと分かっている、ただ独りで努力しなければならぬことは、つい敬遠してしまうといった風である。

物事をするのに、イキナリなこととはしないが、単に慎重だというよりも、むしろ、「むだぼね」を折らないように気をつけるといった方が当たっている。当たれば大きい、はずればゼロといったことには手を出さないのである。決しはむだにはならないと見込みがつけば、多少の反対は押し切るし、また、それで急に誤解されたりすることはないと思っている。自分から先に立ってやっつけていく生徒である。行動派なので、まとまった話をするのには、テキパキとはいかない。

1.3. 知的水準による差違— 知的に高ければ、事の見通しも一層確かになり、率先して実行し、しかも成功する確率も高くなるから、仲間をリードしていけることになる。運動部などのリーダーとしては適した人物であろう。

知的に低ければ、見当はずれのことをがんばったりすることになり、集団の中でうまく協調していけなくなる面が出てくるだろう。

2. 考えられる問題行動または不適応

2.1. 男生徒— 自分の好みを押し通そうというところが、他方での危険回避の傾向とバランスがとれているからいいのだが、友人の選択などは、気の合った連中だけということになるので、この辺からそのバランスが崩れる心配はある。仲間たちとの間で出てきた雰囲気や一種の標準が、時としては、仲間以外の一般社会のそれと調和しないこともありうるので、その時には、仲間と子ども「困ったヤツラ」になるし、家庭や学校でも違和感が増大し、それが怠学などを招来することは考えられなくない。

2.2. 女生徒— 仲間したいということは、男生徒と同様であるが、チャッカリしたところが強いので、バカなまねはしそうもない。いわゆる勉強は好きな方ではないが、進学問題で責められてくる可能性は男生徒ほど高くないので、まず、問題は起こさないであろう。

この例において、夫の方の自己認知と妻からの認知との違いは、第5項目と第6項目の2項目だけであるのに対し、妻の方の自己認知と夫からの認知との違いは、逆に、第5項目と第6項目とを除く他の6項目である。ここで、それぞれの自己認知を基準にとれば妻の夫についての認知はかなり正確であるのに、夫の妻についての認知は非常に誤まりが多いということになる。しかしこの夫婦の仲人をした筆者が判断する限り、何年間にわたり、少くとも年に1～2回は両者に接触している限りでの筆者の認知を基準とすれば、夫婦ともに、相手からの認知がむしろ正しいのである。そうしてみると、夫の自己認知の方が、妻の自己認知よりも基準に近いことになる。また事実、この認知のズレの大きさは、彼等それぞれが、各自の職場やその他の関係での人々との間に展開する対人関係上の問題の多さと正の関係があるといえそうである。

このような事例は他にもあるのではあるが、人々の性格適応の診断において、その診断基準をどこに求めるかの問題はともかくとしても、自己認知と他者認知とのズレの大小が何を意味するのかを明らかにしていくことがまず取り上げられなければならない。この問題は単に、調査CDPAだけのものではなく、少なくとも、性格診断における自己認知または自己評定と他者からの認知または評定の関係および総合に関する一般的な問題である。単純化して示せば、

1)自己認知として「私はバカである」

他者からの認知として「彼はバカである」

2)自己認知として「私はバカである」

他者からの認知として「彼はバカでない」

3)自己認知として「私はバカでない」

他者からの認知として「彼はバカである」

4)自己認知として「私はバカでない」

他者からの認知として「彼はバカでない」

の四つの例をどう捉えるべきかという問題であって、「バカ」の代わりに「利巧」「病氣」「ケチ」等々を入れてみれば、さらにその問題の性質は明らかになる。

第二の問題としては、適応の研究などでしばしば行なわれている「理想自己」と「現実自己」との関係の問題が、CDPAの場合にもある。しかも、CDPAでは、「現実自己」をできるだけ忠実に反応させる手段として、先に「理想としてはかくありたい」ものを答えさせ、次に「実際にはこうである」ものを答えさせている。したがって、材料は毎回入手しているわけである。既に1,000名ほどの高校生について、両者の関係を一応調べたが、「理想自己」と「現実自己」とが一致しているものは1%に満たない。そこで99%以上の者についての「理想自己」と「現実自己」との喰いちがいを、どのように解釈または理解していくべきかを検討する必要のあることは、ここでとくに説明を要しないことである。

第三に、上記の問題が専ら「性格診断」の方法に直接関係するものであったのに対し、若干他の事柄がからんでくる問題ではあるが、CDPAの結果の時間経過に伴なう変化の問題がある。もともとわれわれは、CDPAによって捉えられるような「性格像」が恒常不変のものだとは考えていない。その実証的根拠の一つとしては、cross-sectional な資料として、われわれの基礎資料を用い、中学生と高校生とに分けてそれぞれのパターンの出現度を見ると、中学生よりも高校生の方に1.5倍以上も多く出現するパターンは、

5.* 6.* 7.* 8.* 13.* 14.* 15.* 16.* 22.*
24.* 27. 28. 29.* 30.* 31.* 32.* 37. 38.
63. 64. 95. 111. 133. 134. 135. 136. 149.
157. 173. 205. の30個であり、これらのパターンの内部をみると、

第1項目では73.3%がA「好き嫌いで判断することが多い」

第2項目では90.0%がA「ひまがあれば、一人で本を読んだり音楽を聞いたりしたい」

第3項目では80.0%がA「物事をするとき、失敗など考えていたら何もやれない」

第6項目では93.3%がB「自分が善意でやったこと

は、だいたい通ずるものだ」
 になっており、他の項目では特定の傾向はない。したがって、高校生に多いパターンの特徴としては、

I II III IV V VI VII VIII……項目番号

A A A x x B x x……反応

となり、この条件を満足するパターン16個のうち14個は、さきにとり出したパターンの中にある（番号に*印がつけてあるもの）。

一方、高校生よりも中学生の方に1.5倍以上多く出現するパターンは、

25. 50. 57. 82. 83. 84. 90. 97. 98.*
 100.* 106.* 108.* 114.* 116.* 120. 121.
 122* 170. 172. 178. 179. 180. 188. 204.
 209. 210. 212. 217. 218. 226.* 227. 228.*
 233. 234.* 236.* 241. 242.* 243. 244.*
 249. 250.* 252.*

の42個で、その内部には、

第2項目で78.6%がB「ひまがあれば友人とわいわいやる方が好きだ」

第3項目で73.8%がB「物事をするとき、失敗の危険のないことを確かめてやるべきだ」

第6項目で97.6%がA「自分が善意からやっても、人に誤解されることが多い」

第8項目で69%がB「趣味（好物）は、はっきりしている」

のような偏りがある。中学生に多いパターンの特徴としては、

I II III IV V VI VII VIII

x B B x x A x B

となり、この条件を満足するパターン16個のうち、15個はさきにかかげたパターンの中にある（*印のもの）。

このようなやり方で取り出した、中学生と高校生の特徴を比較してみると、第2、第3および第6項目で反対の傾向を示している。また、中学生パターンの15個の出現度の合計は、中学生が542で、高校生が265であり、高校生パターンの14個の出現度合計は、中学生で、303、高校生で606であって、必しも多くはないが、これらのパターンにおいて、中学生パターンでは542が265に下り、高校生パターンでは303が606に上ることは、一応、中学時代から高校時代へかけての変化と考えることができる。

この変化が、いわば年齢を加えるにつれて「自然に」起ってくるものかどうか、あるいは教育や指導に伴って生起するものかどうかが問題なわけであるが、性格像（少なくとも自己認知によるそれ）が恒常的なものでな

いことだけは明らかである。そこで、その非恒常性すなわち性格像の変化を促進または抑制する条件として、どれほど教育または学習が有効であるのかを明らかにしていく必要がある。

それと同時に、性格像の変化といっても、その変化の限界あるいは変化の底を流れる筋を明らかにする問題もある。例えば、CDPAのパターン1番の者が、変化していくといっても、それが2番から256番までのすべてのパターンに変わりうるということがありうるかどうか。ありえないとすれば、限界はどこにあるのか、の問題が生ずる。それは性格の層構造へつながるかもしれないし、不変部分と変化部分との力動的構造変化と考えることに導かれるかもしれない。要するに、大量の追跡研究が必要となる。

第四に、先の変化の問題で実例提出をしたように、中学生と高校生、男子と女子あるいは都市と農村といったような、社会的、文化的条件等が異なる集団の、集団としての特徴をどうやって明らかにするか、という問題がある。調査の結果が1個の値にまとめるとか、型に分けるにしても高々数個の型にまとめるとかならば、両集団の分布を比較することによって、容易に集団の特徴を明らかにすることができる。ところが、CDPAは、256のパターンに分類されるので、しかも、そのパターンの基になっている8個の項目が、単に加算的に扱われるのではなく、各パターンとして、全体的に関連させつつ解釈されたものであるので、分類カテゴリーを単純に減少させるわけにはいかない。この点で、この問題が、いわば、CDPA特有の研究問題となるわけである。

本論文では、以上述べた諸問題のうち、最後の集団特徴を明らかにする方法の問題について、たまたま恰好の資料が入手できたので、若干の試みをし、その結果を比較検討したい。その資料は、名古屋市の予備校Kの生徒に実施したCDPAの結果である。そこで、問題は、一般高校生（基礎資料による）に対して、浪人集団はどのような特徴をもっているのか、そして、その特徴を明らかにするためには、どのような方法を用いるのがよいかを明らかにすることとなる。

II 資料

ここで用いる資料としては基礎資料から高校生だけをとり出した19,222名を基本集団とし、予備校KでCDPAを受けた5,497名を浪人集団として用いる。この両集団について比較のために、256個のパターンの出現度（万分率）を計算した（表1）。

以下の処理は、すべてこの結果を利用した。

C D P Aによる集団特徴の研究

表1

集団別の出現度(万分率)

パターン 番 号	出 現 度		備 考	パターン 番 号	出 現 度		備 考
	基本集団	浪人集団			基本集団	浪人集団	
1	51	47	③	256	30	64	① ② ③
2	26	27		255	39	67	① ② ③
3	47	46	③	254	17	15	②
4	37	47	③	253	20	13	②
5	55	35	③	252	15	35	②
6	51	20	① ② ③	251	24	31	
7	86	46	① ② ③	250	8	9	②
8	75	49	① ② ③	249	9	20	②
9	15	20	②	248	43	35	③
10	19	24	②	247	51	62	② ③
11	20	44	② ③	246	24	9	②
12	24	53	① ③	245	28	31	
13	21	27		244	17	22	②
14	27	20	②	243	25	46	③
15	35	64	① ② ③	242	8	11	②
16	44	55	③	241	12	18	②
17	30	46	③	240	57	40	③
18	22	35		239	63	53	② ③
19	62	64	② ③	238	44	44	③
20	43	58	③	237	42	27	③
21	32	38		236	15	9	②
22	28	27		235	24	31	
23	72	60	② ③	234	11	7	②
24	63	58	② ③	233	17	20	②
25	8	47	① ② ③	232	79	46	① ② ③
26	14	25	②	231	84	76	② ③
27	39	67	① ② ③	230	69	24	① ② ③
28	36	71	① ② ③	229	72	40	① ② ③
29	17	35	②	228	21	20	②
30	18	11	②	227	33	36	
31	42	47	③	226	20	15	②
32	44	95	① ② ③	225	28	20	②
33	44	51		224	46	73	① ② ③
34	44	40	③	223	50	69	② ③
35	73	64	② ③	222	22	25	
36	41	42	③	221	24	38	
37	93	35	① ② ③	220	27	51	③
38	104	29	① ② ③	219	30	47	③
39	115	55	① ② ③	218	8	25	②
40	111	58	① ② ③	217	13	16	②

個 人 研 究

41	18	36		216	43	56	③
42	25	31		215	65	46	② ③
43	35	46	③	214	25	20	②
44	23	47	③	213	33	22	
45	32	27		212	21	20	③
46	30	25		211	38	47	②
47	40	69	① ② ③	210	7	15	②
48	47	49	③	209	19	24	
49	34	36		208	50	44	③
50	22	20	②	207	46	53	③
51	47	62	② ③	206	30	25	
52	36	44	③	205	43	36	③
53	38	22		204	11	15	②
54	33	25		203	21	42	③
55	68	51	② ③	202	14	25	②
56	60	44	② ③	201	14	9	②
57	7	38	① ②	200	48	38	③
58	11	9	②	199	77	33	① ② ③
59	25	44	③	198	34	7	① ②
60	20	35	②	197	49	20	① ② ③
61	13	15	②	196	21	15	②
62	13	11	②	195	24	18	②
63	33	47	③	194	16	9	②
64	28	40		193	19	20	②
65	24	20	②	192	34	46	③
66	23	20	②	191	36	47	③
67	60	60	② ③	190	22	24	
68	32	33		189	20	25	②
69	61	36	① ② ③	188	21	44	③
70	43	27	③	187	19	35	②
71	99	60	① ② ③	186	17	31	②
72	75	42	① ② ③	185	16	9	②
73	18	25	②	184	54	36	③
74	11	13	②	183	57	53	③
75	33	29		182	43	24	③
76	24	20	②	181	33	25	
77	26	25		180	27	31	
78	27	16		179	32	25	
79	57	56	③	178	15	22	②
80	36	42	③	177	30	16	②
81	36	44	③	176	86	86	② ③
82	19	24	②	175	59	69	② ③
83	75	71	② ③	174	75	69	② ③
84	42	71	① ② ③	173	63	51	② ③

C D P A による 集団特徴の研究

85	48	60	② ③	172	30	62	① ② ③
86	31	13	②	171	37	62	① ② ③
87	129	123	② ③	170	25	42	③
88	67	78	② ③	169	27	42	③
89	32	27		168	124	67	① ② ③
90	11	18	②	167	113	95	② ③
91	75	118	① ② ③	166	140	60	① ② ③
92	36	55	③	165	112	87	① ② ③
93	23	24		164	41	40	③
94	22	22		163	54	60	② ③
95	83	129	① ② ③	162	58	56	③
96	55	75	② ③	161	46	46	③
97	28	20	②	160	39	49	③
98	22	15	②	159	34	60	① ② ③
99	56	40	③	158	26	51	① ③
100	36	22		157	18	33	②
101	70	40	① ② ③	156	20	38	②
102	59	22	① ③	155	27	53	① ③
103	108	58	① ② ③	154	17	18	②
104	82	42	① ② ③	153	15	24	②
105	14	11	②	152	44	40	
106	13	15	②	151	51	62	② ③
107	25	40		150	32	24	
108	20	20	②	149	40	35	
109	30	18		148	23	36	
110	28	13		147	30	56	③
111	59	51	③	146	14	31	②
112	39	31		145	17	22	②
113	30	33		144	63	76	② ③
114	18	13	②	143	49	71	② ③
115	58	76	② ③	142	50	44	③
116	32	29		141	35	42	③
117	45	22	③	140	23	53	① ③
118	29	16		139	27	49	③
119	97	75	② ③	138	22	35	
120	50	44	③	137	16	44	① ② ③
121	10	18	②	136	92	38	① ② ③
122	9	13	②	135	78	60	② ③
123	41	49	③	134	78	36	① ② ③
124	23	40		133	63	49	② ③
125	17	20	②	132	25	24	
126	14	18	②	131	28	53	① ③
127	48	64	② ③	130	29	24	
128	31	46	③	129	32	27	

個 人 研 究

表1の備考欄には、後に述べるような、集団の特徴をとり出す三つの試みに利用されたパターンを示してある。すなわち、①は第一の試みに利用したもの、②は第二の試みに、③は第三の試みに利用したものであることを示す。

Ⅲ 集団特徴抽出の試み

1. 第一に考えられる方法は、基本集団と浪人集団との各パターンごとの出現度の相関を考えるものであ

る。表2はその相関表である。この相関係数は0.605であるが、それは両集団の相似を意味するほどのものではない。そこで、両者の特徴を探すとすれば、相関係数を低めるのに効いているパターンをとり出し、それらのパターンに共通した特徴があるかどうかを調べてみることである。

具体的には、基本集団の出現度と浪人集団の出現度との間に25以上の差のあるパターンを拾い出した(表1の備考欄に①と誌したもの)。

表2 出現度の相関表

浪 人 集 団	基 本 集 団												計
	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	101	以 上	
101 以上			1		4	1		1	1	1		1	9
91 ~ 100				2	1		1						4
81 ~ 90					2		1	1			1		5
71 ~ 80				3	3	2	2	1				1	12
61 ~ 70			1	2	2	4	1	2					12
51 ~ 60		1	1	4	2	6	3	2					19
41 ~ 50		1	4	6	10	6	3	3			1		34
31 ~ 40	1	1	12	5	12	2	5	1					40
21 ~ 30	1	18	12	13	10	7	2						63
11 ~ 20	6	21	11	9	2								49
1 ~ 10	1	5	1	1	1								9
計	9	47	43	46	44	32	17	11	2	2	3		256

これらを、基本集団の方に25以上多く出現するパターン(表3)と浪人集団の方に25以上多く出現するパターン(表4)とに分けて製表すると次のようになる。

表3にかかげられた25個のパターンをみると、主要項

目への反応(AまたはB)として共通する特徴は、一目瞭然であって、第4、第5項目へは一致してAであり、第6には一致してBである。その他の項目への反応はいずれも明らかな傾向(約70%以上の集中)はみられない。

表3 基本集団の出現度が25以上多いパターン

パ タ ー ン 番 号	主項目への反応 (Bのみ示す)								出 現 度	
	1	2	3	4	5	6	7	8	基本集団	浪人集団
6					B	B			51	20
7					B	B			86	46
8					B	B	B		75	49
37			B		B				93	35
38			B		B	B			104	29
39			B		B	B			115	55

C D P A による 集団特徴の研究

40		B			B	B	B	111	58
69		B			B			61	36
71		B			B	B		99	60
72		B			B	B	B	75	42
101		B	B		B			70	40
102		B	B		B		B	59	22
103		B	B		B	B		108	58
104		B	B		B	B	B	82	42
134	B				B		B	78	36
136	B				B	B	B	92	38
165	B		B		B			112	87
166	B		B		B		B	140	60
168	B		B		B	B	B	124	67
197	B	B			B			49	20
198	B	B			B		B	34	7
199	B	B			B	B		77	33
229	B	B	B		B			72	40
230	B	B	B		B		B	69	24
232	B	B	B		B	B	B	79	46

表4 浪人集団の出現度が25以上多いパターン

パターン 番号	主項目への反応 (Bのみ示す)								出現度	
	1	2	3	4	5	6	7	8	基本集団	浪人集団
12					B		B	B	24	53
15					B	B	B		35	64
25				B	B				8	47
27				B	B		B		39	67
28				B	B		B	B	36	71
32				B	B	B	B	B	44	95
47			B		B	B	B		40	69
57			B	B	B				7	38
84		B		B			B	B	42	71
91		B		B	B		B		75	118
95		B		B	B	B	B		83	129
131	B						B		28	53
137	B				B				16	44
140	B				B		B	B	23	53
155	B			B	B		B		27	53
158	B			B	B	B		B	26	51
159	B			B	B	B	B		34	60
171	B		B		B		B		37	62
172	B		B		B		B	B	30	62
224	B	B		B	B	B	B	B	46	73
255	B	B	B	B	B	B	B		39	67
256	B	B	B	B	B	B	B	B	30	64

そこで、基本集団の方に多い傾向の共通特徴は

$$x x x A \quad A B x x \dots\dots(1)$$

となる。ここに x は、先にも示したように、A または B であり、双方を含むことを意味する。

同じようにして、表4から、浪人集団に多い傾向の共通特徴として

$$x A A x \quad B x B x \dots\dots(2)$$

を導くことができる。ここで、第2、第3項目がAであるというのは、73%の集中があるからで、第5項目は91%、第7項目は82%の集中がみられるのに比べ若干低い、7割以上が一方に集中していることを一応のメドとしているからである。

さて、(1)の特徴を満足させるパターンは、表3に示した25項目のほか、5, 70, 133, 135, 167, 200, 230の7個のパターンを加えて32個であり、このすべてのパターンの出現度の合計は、基本集団で2,571、浪人集団で1,448であり、明らかに基本集団の特徴であるといえる。基本集団の26%弱はこの特徴を持っているのであり、浪人集団にはそれは14%強しかいないことになる。

他方、(2)の特徴を満足させるパターンは、すべてで16個あるが、そのうち、表4に示されているのは8個にすぎない。残りの8個を合せて示せば、表5のようである。

表5 Patten $x A A x \quad B x B x$ (浪人集団の特徴)

Patern No.	出現度 (万分率)		備 考
	基本集団	浪人集団	
11	20	44	差 24
12	24	53	
15	35	64	
16	44	55	差 11
27	39	67	
28	36	71	
31	42	47	差 5
32	44	95	
139	27	49	差 22
140	23	53	
143	49	71	差 22
144	63	76	差 17
155	27	53	
156	20	38	差 18
159	34	60	
160	39	49	差 10
出現度合計	566	945	
平均出現度	35.4	59.1	

この表で明らかのように、すべてのパターンで浪人集団が多いといっても、この特徴をもつ者は全体の9%強にすぎず、また、基本集団との割合も37%:63%でしかなく、十分に浪人集団の特徴であるとはいえないように思われる。

次に、基本集団の特徴と浪人集団の特徴とを対照的に明らかにすることをねらって、表3と表4との両者について、第1項目から順に反応(AまたはB)の傾向を対比してみると、第1、第2、第8の3項目に関しては、基本集団の方に多いパターンと浪人集団の方に多いパターンとの間に差ありとはいえないが、それ以外の項目に関しては、いずれも、5%以下の危険率で有意な差がある(表6)、とくに、第5項目は極めて明瞭に両群のパターンで逆の反応傾向を示している。これを記号で示せば、

$$\text{基本集団の特徴} = x x B A \quad A B A x \dots\dots(3)$$

$$\text{浪人集団の特徴} = x x A B \quad B A B x \dots\dots(4)$$

表6 両パターン群の関係

項目番号	パ タ ー ン 群	反 応		計
		A	B	
第3項目	表3のパターン	11	14	25
	表4のパターン	16	6	22
	計	27	20	47
第4項目	表3のパターン	25	0	25
	表4のパターン	8	14	22
	計	33	14	47
第5項目	表3のパターン	25	0	25
	表4のパターン	2	20	22
	計	27	20	47
第6項目	表3のパターン	0	25	25
	表4のパターン	13	9	22
	計	13	34	47
第7項目	表3のパターン	13	12	25
	表4のパターン	4	18	22
	計	17	30	47

となる、この特徴の内容を記せば、

基本集団の特徴

第3項目—「物事をするとき、失敗の危険のないことを確かめてやるべきだ」

第4項目—「自分の考えをまとめてから話すタイプ」

第5項目—「自分の意見の方が優れていると思って

C D P A による 集団特徴の研究

も、みんなが賛成しないときはみんなの考
えに従う」
第6項目「自分が善意でやったことは、だいたい通
ずるものだ」
第7項目「根気はあるが、ヒラメキがない」
浪人集団の特徴
第3項目「物事をするとき、失敗など考えていたら
何もやれない」
第4項目「話をしながら自分の考えをまとめるタイ
プ」

第5項目「自分の意見の方が優れていると思った時
は、自分の意見を最後までおし通すことが
多い」
第6項目「自分が善意からやっても、人に誤解され
ることが多い」
第7項目「ヒラメキはいいけれど、根気がない」
ということになる。この5項目の反応全体を統一的に解
釈すると浪人集団はいかにも浪人らしい感じに思える。
しかし、これらの特徴に合うすべてのパターンを拾い出
し、その出現度をみると表7に示す通りであって、

表7 両 集 団 の 対 照 的 特 徴

Pattern $x x B A$ $A B A x$ (基本集団)				Patten $x x A B$ $B A B x$ (浪人集団)			
NO	出 現 度		備 考	NO	出 現 度		備 考
	基本集団	浪人集団			基本集団	浪人集団	
37	93	35	すべて 表3の中 にあり	220	27	51	差 24
38	104	29		219	30	47	差 17
101	70	40		156	20	38	差 18
102	59	22		155	27	53	
165	112	87		92	36	55	差 19
166	140	60		91	75	118	
229	72	40		28	36	71	
230	69	24		27	39	67	
現出度合計	719	337		出現度合計	290	500	
平均	89.9	42.1		平均	36.3	62.5	

* 左右対応する位置のパターンは、完全に逆の反応パターンである。

浪人集団の特徴に関しては、両集団の出現度の差は十分に大きいとはいえない。

このような結果は、もともと両集団のパターン毎の出現度の相関(表2)が高いのであるから、共通した特徴があると考えられるのに、ここで用いたような方法では、それが分離できていないためと考えられる。実際、表7において、基本集団の特徴を備えたパターンに関して、浪人集団の出現度は平均42.1であり、256個のパターンの出現度の平均39.1より若干高いのである。このことは上の推論を支持する方向のものである。要するに、この方法では、両群の特徴を十分には明確にすることができない。

2. 第二に考えられる方法としては、第一の方法の欠陥をも考慮し、次のようなパターン選択を行なった。

(1)それぞれの集団別に、出現度60以上のパターンすべて、

(2)それぞれの集団別に、出現度20以下のパターンすべて、

これによって、当然、両集団を通じてともに出現度60以上のパターンとともに、20以下のパターンとが区別される。

このようにすることによって、第一には、両集団に共通の特徴が見当づけられること、第二には、各集団の特徴が、単に出現度が高いという視点からだけでなく、逆に出現度が低いという視点からも検討することができることになる。

上述の基準で選択されたパターンは表1で②の印で示した通りである。これらについて、第一の方法で行なったと同じ手続で特徴を導き出した。

(i) 基本集団、浪人集団ともに出現度60以上を示すパターンは20個で、それについて整理すると、

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	11	11	11	12	15	5	3	14
反応B	9	9	9	8	5	15	17	6

したがって、両集団共通の特徴の一面として、

$x x x x$ $A B B A$(5)

が得られる。

(ii) 基本集団, 浪人集団ともに出現度20以下を示すパターンは33個で, それを整理すれば,

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	15	7	11	13	7	26	30	13
反応B	18	26	22	20	26	7	3	20

したがって, 両集団共通の特徴の一面として,

$$x B x x \quad B A A x \dots\dots(6)$$

が得られる。

(iii) 特徴の(5)と(6)との間で, 反応傾向が明瞭に逆の対応をしているのは, 第5, 第6および第7の3項目で

ある。対応の明らかでない第2項目と第8項目とについて, 出現度の多少と反応傾向との間の関連を χ^2 検定すると, 2.5%および5%水準で有意であった。そこでこの結果を加えると,

両集団共通に多く出現するパターンの特徴は

$$x A x x \quad A B B A \dots\dots(7)$$

となり, それは出現度の低い特徴

$$x B x x \quad B A A B \dots\dots(8)$$

と逆の対応をしていることになる。この特徴を示すそれぞれ8個ずつのパターンの番号と出現度とを示せば, 表8に示す通りである。

表 8 共 通 的 特 徴

多いPattern $x A x x \quad A B B A$			少ないPattern $x B x x \quad B A A B$		
No.	出 現 度		No.	出 現 度	
	基本集団	浪人集団		基本集団	浪人集団
7 *	86	46	250	8	9
23	72	60	234	11	7
39 *	115	55	218 *	8	25
55 *	68	51	202 *	14	25
135	78	60	122	9	13
151 *	51	62	106	13	15
167	113	95	90	11	18
183 *	57	53	74	11	13
出現度合計	640	482	出現度合計	85	251
平均	80.0	60.3	平均	10.6	15.6

* 印は選択条件に合わなかったパターンであることを示す

(iv) 基本集団だけにおいて出現度60以上を示すパターンは24個である。それは

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	14	13	10	20	22	0	9	13
反応B	10	11	14	4	2	24	15	11

であって, 基本集団の特徴として

$$x x x A \quad A B x x \dots\dots(9)$$

が得られる。

(v) 他方, 基本集団だけにおいて出現度20以下のパターンは25個であり, それは,

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	10	18	16	6	6	22	19	13
反応B	15	7	9	19	19	3	6	12

であって, 基本集団の逆の特徴として(10)が得られる。

$$x A x B \quad B A A x \dots\dots(10)$$

(vi) 基本集団の両面の特徴(9)と(10)との間で逆の対応の明らかでない第2項目と第7項目とについて χ^2 検定を試みると, 前者は有意な関連ありとはいえず, 第7項目は1%水準で有意である。そこで, この結果を加えて考えると,

基本集団だけに多く出現するパターンは(11)であり, そ

$$x x x A \quad A B B x \dots\dots(11)$$

れは裏側に(12)という特徴を持っているといえる。この

$$x x x B \quad B A A x \dots\dots(12)$$

特徴を満足させるパターンは, それぞれ16個ずつあるが, それは表9に示す通りである。

表9 基本集団の特徴

多いPattern $x x x A \quad A B B x$			少ないPattern $x x x B \quad B A A x$		
No.	出現度		No.	出現度	
	基本集団	浪人集団		基本集団	浪人集団
7	86	46	250 *	8	9
8	75	49	249	9	20
39	115	55	218	8	25
40	111	58	217 *	13	16
71 *	99	60	186	17	31
72	75	42	185 *	16	9
103	108	58	154 *	17	18
104	82	42	153	15	24
135 *	78	60	122 *	9	13
136	92	38	121 *	10	18
167 *	113	95	90 *	11	18
168 *	124	67	89 *	32	27
199	77	33	58 *	11	9
200	48	38	57	7	38
231 *	84	76	26	14	25
232	79	46	25	8	47
出現度合計	1446	863	出現度合計	205	347
平均	90.4	53.9	平均	12.5	21.7

* 印は選択条件に合わなかったパターンであることを示す

(vii) 浪人集団だけにおいて出現度 60 以上を示すパターンは 23 個であり、それは

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	11	13	12	7	7	8	1	16
反応B	12	10	11	16	16	15	22	7

であって、浪人集団の特徴として

$$x x x B \quad B x B A \dots\dots(13)$$

が得られる。

(viii) 他方、浪人集団だけにおいて出現度 20 以下のパターンは 23 個であり、それは、

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	13	4	13	16	18	12	18	7
反応B	10	19	10	7	5	11	5	16

表10 浪人集団の特徴

多いPattern $x A x B \quad B x B A$			少ないPattern $x B x A \quad A x A B$		
No.	出現度		No.	出現度	
	基本集団	浪人集団		基本集団	浪人集団
27	39	67	230 *	69	24

であって、浪人集団の逆の特徴として

$$x B x A \quad A x A B \dots\dots(14)$$

が得られる。

(ix) 浪人集団の両面の特徴(13)と(14)との間で、逆の対応の明らかでない第2項目について X^2 検定をすると、0.5%水準で有意である。そこで、この結果を尊重すると、

浪人集団だけに多く出現するパターンは

$$x A x B \quad B x B A \dots\dots(15)$$

であり、その裏側には特徴(14)があるということになる。

$$x B x A \quad A x A B \dots\dots(14)$$

この特徴を満足させるパターンは各8個あるが、それは表10に示す通りである。

個 人 研 究

31 *	42	47	226	20	15
59 *	25	44	198	34	7
63 *	33	47	194 *	16	9
155 *	27	53	102 *	59	22
159	34	60	98	22	15
187 *	19	35	70 *	43	27
191 *	36	47	66	23	20
出現度合計	255	400	出現度合計	286	139
平均	31.9	50.0	平均	35.8	17.4

* 印は、選択条件に合わなかったパターンであることを示す。

このような第2の方法は、各集団について多く出現するパターンと、少ししか出現しないパターンとをとり出し、この両端からそれぞれの集団の特徴を明らかにしようとするものであった。表8～10に示した結果は、各集団ごとに多いとされた特徴については確かに多く、少ないとされた特徴については確かに少ない。この限りでは、この方法は優れたものであるといえよう。しかし、これによって多数出現するパターンとして説明できるのは、共通特徴を含め、基本集団では21%弱であり、浪人集団では9%弱にすぎない。しかも表8～10で明らかのように、特徴を決定するために選択されたパターン（例えば、浪人集団だけに60以上出現するといった基準に合うパターン）のなかに、決定された特徴をもつものが少ないこと、特に浪人集団についてそうであることは、第一の方法と比べて明らかに優れているとはいかぬ。それは、多いものに対して少ないものを対照し、その特徴が逆の対応をなしていることを要請して、正反対の関係のパターンとして取り出そうとしたことに原因しているのかもしれない。また、反応の型の決定基準が甘かった故か、多くの主項目において反応傾向が決定されたため、必然的に該当パターンが少なくなったのでもある。

このことは、一体集団の特徴を決定する場合、その集団のどれ位の割合を包括できるものであるべきかという視点を必要とすることを意味する。そして、その意味では、ある集団にある程度以上多く出現するものの特徴を探っていくべきであり、ある程度以下の少数しか出現しないパターンは、特徴決定の手がかりとしては有効ではないことをも意味している。この第二の方法で、基本集団と浪人集団とで、60以上出現するパターンとして選択したものは、それぞれ44個および43個であって、その出現度の合計は、3,631および3,131であった。これらのなかから特徴を決定したのであるから、その特徴を具備するパターンの出現度が前掲の程度であるのも、むしろ当然かもしれないのである。

3. そこで第3の方法として考えられるのは、特徴

決定の足場となるパターンの出現度合計が少なくとも全出現度合計（つまり10,000）の6割以上になるように選択することである。仮りに、出現度41以上のものを選択してみると、（表1において③の記号をつけたもの）、基本集団では96個のパターンで出現度合計6,154であり、浪人集団では112個のパターンで出現度合計6,466である。

このなかには、もちろん両集団とともに41以上の出現度を示すパターンが70個あり、それらの出現度合計は基本集団で4,621、浪人集団で4,324である。したがって、基本集団だけにおいて41以上の出現度を示すパターンは26個であり、これらの出現度合計は1,533、また、浪人集団だけで41以上の出現度を示すパターンは42個で、これらの出現度合計は2,142である。抽出された特徴が、この割合程度に両集団の出現度をカバーしていることが望ましいわけである。

(i) さて、第一、第二の方法の場合と同様な手続きで、全集団ともに41以上の出現度を示す70個のパターンについて、両集団に共通する特徴を探ってみよう。主項目への反応は、

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	41	36	35	41	46	19	11	43
反応B	29	31	35	29	24	51	59	27

となり、若干基準より甘い第5項目での反応Aへの集中度65.7%を生かすと、共通特徴としての反応パターンは

$$x x x x \quad A B B x \dots\dots(16)$$

ということになり、これに該当するパターンは表11に示す32個になる。

(ii) 次に、基本集団でのみ41以上の出現度を示すパターンから、この集団の特徴を探ると、

主項目	I	II	III	IV	VI	V	VII	VIII
反応A	11	11	11	21	23	3	17	11
反応B	15	15	15	5	3	23	9	15

C D P A による 集団特徴の研究

となり、反応特徴としては第7項目を甘くとすると、 $x x x A \ A B A x \dots\dots(17)$
 (集中度65.4%)

表11 Pattern $x x x x \ A B B x$ (共通特徴)

Pattern No.	出現度(万分率)		備考
	基本集団	浪人集団	
7	86	46	
8	75	49	
23	72	60	
24	63	58	
39	115	55	
40	111	58	
55	68	51	
56	60	44	
71	71	60	
72	75	42	
87	129	123	
88	67	78	
103	108	58	
104	82	42	
119	97	75	
120	50	44	
135	78	60	基本集団でのみ41以上
136	92	38	
151	51	62	基本集団でのみ41以上
152	44	40	
167	112	95	
168	124	67	
183	57	53	基本集団でのみ41以上
184	54	36	
199	77	33	基本集団でのみ41以上 "
200	48	38	
215	65	46	
216	43	56	
231	84	76	
232	79	46	
247	51	62	基本集団でのみ41以上
248	43	35	
出現度合計	2,432	1,786	
平均出現度	76.0	55.8	

となり、これに該当するパターンは表12に示すような16個になる。

表12 $x x x A A B A x$ (基本集団の特徴)

パターン No.	出現度(万分率)		備 考
	基本集団	浪人集団	
5	55	35	
6	51	20	
37	93	35	
38	104	29	
69	61	36	
70	43	27	
101	70	40	
102	59	22	
133	63	49	浪人集団でも41以上
134	78	36	
165	112	87	浪人集団でも41以上
166	140	60	"
197	49	20	
198	34	7	基本集団においても40以下
229	72	40	
230	69	24	
出現度合計	1,153	567	
平均出現度	72.1	35.4	

この表で明らかのように、基本集団では、浪人集団の2倍も出現するわけで、明らかにこれは基本集団に特徴的なパターンであるといえる。

(iii) 浪人集団でのみ41以上の出現度を示すパターンから、この集団の特徴を探ると、

主項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
反応A	18	31	25	18	8	29	8	25
反応B	24	11	17	24	34	13	34	17

となり、反応特徴としては

$$x A x x B A B x \dots\dots(18)$$

となる。これに該当するパターンは表13に示すような16個になる。

表13 Pattern $x A x x B A B x$ (浪人集団の特徴)

Pattern No.	出現度(万分率)		備 考
	基本集団	浪人集団	
11	20	44	
12	24	53	
27	39	67	
28	36	71	
43	35	46	

44	23	47	浪人集団で40以下
56	25	44	
60	20	35	
139	27	49	
140	23	53	
155	27	53	浪人集団で40以下
156	20	38	
171	37	62	
172	30	62	浪人集団で40以下
187	19	35	
188	21	44	
出現度合計	426	803	
平均出現度	26.6	50.2	

この表によれば、浪人集団における出現度合計は800程度で多いとはいえないが、それでもそれは基本集団の2倍近い出現度であり、一応浪人の特徴的反應パターンであると見られる。

(iv) 以上の特徴的反應パターンによってカバーされる割合は、基本集団の場合、共通的反應パターンをも合わせて35.9%であり、浪人集団の場合には、同じく共通的反應パターンを合わせて25.9%である。この結果は、第一、第二の方法とくらべて明らかに優れたものであるといえよう。

しかしながら、最初に出現度41以上という基準で選択したのは、基本集団で全出現度の61.5%を占め、浪人集団では64.7%にも及ぶものであったことから考えると、なお、十分に満足すべきものとはいえない。なお、第二次、第三次の特徴抽出の余地があると考えられる。

そこで、上述の第一次の各特徴に該当するパターンを削除した残りから、さらに、共通的反應特徴、基本集団の反應特徴、浪人集団の反應特徴を抽出する試みをする、次のような結果が得られた。すなわち

$$\begin{aligned} \text{共通特徴} & x x x x x x B x \\ \text{基本集団} & x x B A x x x x \\ \text{浪人集団} & x x x B B x B x \dots\dots(19) \end{aligned}$$

(但し、浪人集団第4項目は集中度65.5%)

であって、かろうじて浪人集団の第二次特徴として(19)のパターン32個が存在するといえる。基本集団の第二次特徴に該当するものは64個もあり、第二次共通特徴にいたっては128個もあることになるので問題にならない。

そこで、浪人集団の第二次特徴に該当する32個のパターンを示せば表14の通りである。このうち、8個のパターンは第一次特徴をも満足するものである、純然たる第二次特徴だけのものは24個である。そしてまた、この24個によってカバーできる出現度は全体の14.4%であ

C D P Aによる集団特徴の研究

表14 Pattern $x x x B B x B x$
(浪人集団第二次特徴)

パターン No.	出現度(万分率)		備 考
	基本集団	浪人集団	
27	(39)	(67)	第一次特徴をもつ(表13)
28	(36)	(71)	"
31	42	47	基本集団も41以上
32	44	95	"
59	(25)	(44)	第一次特徴をもつ(表13)
60	(20)	(35)	"
63	33	47	
64	28	40	浪人集団でも40以下
91	75	118	基本集団も41以上
92	36	55	
95	83	129	基本集団も41以上
96	55	75	"
123	41	49	"
124	23	40	浪人集団でも40以下
127	48	64	基本集団も41以上
128	31	46	

155	(27)	(53)	第一次特徴をもつ(表13)
156	(20)	(38)	"
159	34	60	
160	39	49	
187	(19)	(35)	第一次特徴をもつ(表13)
188	(21)	(44)	"
191	36	47	
192	34	46	
219	30	47	
220	27	51	
223	50	67	基本集団も41以上
224	46	73	"
251	24	31	浪人集団でも40以下
252	15	35	"
255	39	67	
256	30	64	
出現度合計	943	1,442	()のものを除く
平均出現度	39.3	60.1	()のものを除く

り、かくして、浪人集団は、共通特徴により17.9%を、第1次特徴により8%を、第2次特徴により14.4%をカバーでき、合計40.3%になる。しかも、浪人であって基本集団の特徴を有するもの(表12) 567名を合せれば、ここに抽出した反応特徴のパターンによって、実に46%がカバーできることになる。同様に、基本集団についても、基本集団のなかで第1次第2次の浪人特徴をもつものを合せれば、9.5%がカバーされることになる。そして、これだけのものをカバーするパターンの数は、88個

であって、全体で256個のパターンの約1/3 (34.4%)にすぎないのである。

4. 以上三つの方法を試みたが、結局、基本集団と浪人集団とを、少数の特徴でできるだけ多くをカバーするためには、第三の方法がもっともよいということになった。しかし、三つの方法のどれを用いても、両集団で、それぞれ共通の特徴が出てくるようにも思われる。いま、(1)から(19)までの特徴的反応パターンを一括して表にしてみよう(表15)。

表15 抽出された反応パターン一覧

集 団 別	特徴的 反 応 パ タ ー ン		番 号	備 考
基本集団 について	$x x x A$	$A B x x$	(1)	第一の方法
	$x x B A$	$A B A x$	(3)	第一の方法 浪人集団との逆対応による
	$x x x A$	$A B x x$	(9)	第二の方法
	$x x x A$	$A B B x$	(11)	第二の方法 出現度少なるものとの逆対応
	$x x x A$	$A B A x$	(17)	第三の方法
浪人集団 について	$x A A x$	$B x B x$	(2)	第一の方法
	$x x A B$	$B A B x$	(4)	第一の方法 基本集団との逆対応による
	$x x x B$	$B x B A$	(13)	第二の方法
	$x A x B$	$B x B A$	(15)	第二の方法 出現度少なるものとの逆対応
	$x A x x$	$B A B x$	(18)	第三の方法
	$x x x B$	$B x B x$	(19)	第三の方法 第二次特徴

両 集 団 の 共 通 特 徴	$x x x x$	A B B A	(5)	第二の方法
	$x A x x$	A B B A	(7)	第二の方法 出現度少なるものとの逆対応
	$x x x x$	A B B x	(16)	第三の方法

この表を見ると、特徴抽出のためにどのような選択基準を用いるかによって、若干の変動はあるものの、主項目8個のうちの3個についてその特徴を押えれば、

基本集団は $x x x A$ A B $x x$ であり、

浪人集団は $x A x x$ B $x B x$ および

$x x x B$ B $x B x$ であり

共通特徴は $x x x x$ A B B x であるということができよう。このうち、最後の二つは、それぞれ表11 ($x x x x$ A B B x) および表14 ($x x x B B x B x$) に示してあるが、CDPAのパターン番号によってそれぞれの特徴に該当するものを一覧表にすると、表16のようになる。

表16 各集団の特徴該当パターン一覧

共通特徴	基本集団	浪人集団(1)	浪人集団(2)	共通特徴	基本集団	浪人集団(1)	浪人集団(2)
	5	11			133	139	
	6	12			134	140	
7	7	15		135	135	143	
8	8	16		136	136	144	
23		27	27	151		155	155
24		28	28	152		156	156
	73	31	31		165	159	159
	38	32	32		166	160	160
39	39	43		167	168	171	
40	40	44		168	168	172	
55		47		183		175	
56		48		184		176	
	69	59	59		197	187	187
	70	60	60		198	188	188
71	71	63	63	199	199	191	191
72	72	64	64	200	200	192	192
87			91	215			219
88			92	216			220
	101		95		229		223
	102		96		230		224
103	103		123	231	231		251
104	104		124	232	232		252
119			127	247			255
120			128	248			256

これによってみれば、共通特徴と基本集団の特徴は16個のパターンが重複しており、また別に、浪人集団の特

徴の(1)と(2)とも16個のパターンが重複している。そこで、基本集団の特徴をもつパターンから重複した16個を除き、また、浪人集団の特徴(2)をもつパターンから重複した16個を除いて、それぞれの特徴群ごとの出現度合計をみると、

	基本集団	浪人集団
基本集団特徴	1,153	567
共通特徴	2,432	1,786
浪人集団特徴(1)	1,139	1,773
浪人集団特徴(2)	653	1,011
計	5,377	5,157

となり、両集団に出現する反応パターンの過半数がこの4個の特徴によって説明できることになる。

Ⅳ 浪人集団の特徴の解釈

基本集団と共通する特徴は別として、浪人集団の特徴である前述の二つのパターンは、浪人たちの27.8%が含まれるものであった。その主項目に関する反応パターンは前述の通りであるが、それがどのような性格特徴として描き出されるかがこの際問題になるであろう。以下に、その点についての試みを述べてみる。

1. 第一の特徴の解釈

CDPAの解釈は、8個の主項目のほかに、各パターン毎にそのパターンをもつ人々の75%以上が一致して選択している関連項目をも含めてなされている。関連項目はすべてで68個あるが、パターンによって、75%以上の一致した反応のみられる項目は異なり、また項目数も一様ではない。そこに各パターンの性格特徴があると考えられるわけである。⁽³⁾

そこで、浪人集団の第一特徴である $x A x x$ B x B x の反応パターンをもつ32個のパターン(表16)全部において、68個の関連項目への反応(AorB)がどうなっているかを調べた。この際、浪人集団はほとんどが男子であるため、基本集団のなかの高校男子についてだけ調査した。その結果としては、上記の32個のパターンを示す900名余りについて、75%以上が一致する関連項目は1個もなかった。そこで、選択の基準をやや甘くして70%以上が一致してAまたはBと反応している項目を取り出した。それは以下に示す内容の反応である。

「ものごとの計画がたつと、これからが自分の仕事だと思う」

「自分の持ちものは、質のいいものなら数は少なくと

もいい」

「問題がおきたとき、できるだけ自分の胸におさめる」

「友達に何をいわれようと、自分が一度決心したことはどうしてもやりとげたい」

「どちらかといえば、怒ると大声でまくしたてる」

の5項目であり、これに主項目として

「ひまがあれば、一人で本を読んだり音楽を聞いたりしたい」

「自分の意見が優れていると思ったときは、自分の意見を最後までおし通すことが多い」

「ヒラメキはいいけれど、根気がない」

の3つは100%一致して選んでいるわけである。

そこで、この2種類合計8つの手掛りから、浪人の特徴の第一をどう解釈するか、ということになる。そこで、各関連項目がどの主項目に主として関連づけられるかを考えてみると、まず、「持物は少数でも質のいいもの」および「問題が起きたとき胸におさめる」の二つは、「ひまがあれば一人でいたい」という主項目にまず結びつけられよう。また、「計画以後の実行が自分の仕事」というものは、「ひまがあれば一人でいたい」にも、「ヒラメキはあるが根気なし」にも結びつけられるように思われる。次に「友達に何をいわれても……やりとげたい」は「自分の意見を押し通すことが多い」に、また「怒ると大声でまくし立てる」もこの主項目と「根気なし」に結びつけられよう。一応このような粗い関連づけをしたあとで、全体としてのこの反応パターンの特徴は、おおよそ次のように記述することができよう。

「人と広く交際することは好まない。自分独自の行き方をしようとする。センスはいい方だし、自信もあり、好みはウルサイ者が多い。しかし、粘りはなく、綿密さにも欠ける。自分を他人から知られるのは嫌いで、できるだけ自分だけで事を始末しようとする傾向がある。思いつきは豊かな方だが、とにかくそれを試みることの方に重点が行きがちで、自分のアイデアを固執し、何といわれようと考えをかえようとしめない。意地になって頑張る風がある。気が短かく、対人関係の面では稚ないところもあり、すぐカッとなってガナるようなことも少なくない。全般的に明るさは乏しい」

2. 第二の特徴の解釈

浪人集団の第二の特徴である。

xxx B BxBx

という反応パターンをもつ32個のパターン(表16)全部について、前項と同様、68個の関連項目への反応傾向を調べた。この際、32個のうちの半数は第一の特徴をも持

っているわけであるが、除外しないで取扱った。その結果としては、約1,000名のうち75%以上が一致して反応する関連項目は1個しかなかった(後に*印で示す)前項と同様基準を70%以上一致の線まで緩和した。その結果次のような内容の反応において基準以上の一致がみられた。

「めずらしい料理が出たとき、うまそうだなあとと思う」(どうして作るのかとは思わない)

「大好きな菓子など一度に食べてしまう」

「考えているよりも身体を動かしている方がいい」

「頭痛や腹痛などのとき、それにきく薬なら何でもいい」(銘柄などにこだわらぬ)

*「どちらかといえば、怒ると大声でまくしたてる」

の5項目である。これに主項目として、

「話をしながら自分の考えをもとめるタイプ」

「自分の意見が優れていると思ったときは、自分の意見を最後までおし通すことが多い」

「ヒラメキはいいけれど、根気がない」

の3項目を100%一致して選んでいるわけである。

この8項目を、第一の特徴の場合と同様に、相互に関連づけながら解釈してみよう。第一の特徴と比較して、全体としていえることは、第二の特徴の方が明るいといえれば明るい印象があり、また、ガサツさが目立ち、忍耐力が乏しい感じがある。解釈はおおよそ

「我慢ということができない。思いついたらすぐ実行したがる。大体の見当で発言し、人とやり合っている間にどうにか考えがまとまる。その考えや思いつきは深いものではないが、とかく頑張り通す方で、受け入れられないと怒鳴ったりする。物事の内幕や背後を洞察したり、将来をおもんばかったりするところでは乏しい。行動派で、体裁よりも実質をとる傾向がある。全体としては明るいだがガサガサした感じである」

といったことになる。

V (附)成績による特徴の差違

予備校Kからの資料には、そこでの成績が4群に分類され、それぞれの群での各パターンの出現数が記載されていた。以上のように浪人特徴を抽出し、解釈を記述してみると、一体それらは成績の良否に関係があるのかどうかが知りたくなる。そこで附録として、成績群別に各特徴の含まれる割合を計算してみた。

ここで成績の良否というのは、予備校側の記載によれば、

A, 「成績優秀」……………1,224名

B, 「成績中程度」……………1,545名

C, 「成績不良」……………1,864名
 D, 「私立大文科系志望」… 864名
 となっている。この4群をそれぞれについて

- I, 基本集団との共通特徴
- II, 基本集団の特徴
- III, 浪人集団の第一特徴
- IV, 浪人集団の第二特徴

が、それぞれどの割合で含まれているかを、図1に示

した。なお、IとIIの間、IIIとIVの間には共通する部分(パターン)があるので、図ではそれをも合せて示した。

これによれば、共通特徴は「成績不良群」に最も多く(20.0%), 「成績優秀」群に最も少ない(15.3%)。また、基本集団の特徴は「成績中程度」群に最も多く(16.1%), 「私大文科系」群に最も少ない(12.6%)。

図1. 成績と特徴出現率

A	B	C	D
I 7.9%	I 8.2%	I 11.0%	I 9.0%
I・II 7.4%	I・II 9.6%	I・II 9.0%	I・II 7.8%
II 7.6%	II 6.5%	II 4.1%	II 4.9%
その他 49.8%	その他 48.3%	その他 48.2%	その他 49.0%
III 10.5%	III 9.3%	III 9.2%	III 9.1%
III・IV 8.7%	III・IV 7.8%	III・IV 8.1%	III・IV 8.2%
IV 8.1%	IV 10.4%	IV 10.3%	IV 12.0%

しかし、この両特徴については、成績との間に一定の関係はないように思われる。

これに対し、浪人集団の特徴については、第一の特徴は、

- A「成績優秀」 19.2%
- B「成績中程度」 17.2%
- C「成績不良」 17.3%
- D「私大文科系」 17.4%

であって、A群に多く、逆に第二の特徴は、

- A「成績優秀」 16.8%
- B「成績中程度」 18.2%
- C「成績不良」 18.4%

D「私大文科系」 20.3%

であって、成績が悪い者ほど多い傾向がある。このことは、前節の「解釈」と合せ考えても肯けるところである。

文献

1. 荻野 惺：精神病者へ適用したCDPAの検討，名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—1968 15 105~110
2. 続 有恒他：反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(4)，名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—1968 15 21~45
3. 続 有恒編著：臨床的性格適応診断1969 金子書房